は埴輪列の手前でほぼ直線的に停止しており、南北埴輪列の間にはまったく葺石が検出されなかったことから、埴輪列間には葺石が意図的に葺かれなかったものと考えられる（図５）。

この拡張区では後円部と前方部の接点がみつかると予想していたが、調査の結果、確認することができなかった。この事実と 18 トレンチで得られた知見から、後円部と前方部の接点は 17 トレンチよりも下、後円部３段目の中間あたりに存在するものと考えられる。（林）

図５　17トレンチ葺石と埴輪列（西から）

（２）13 トレンチ

13 トレンチは後円部北側斜面に位置し、幅 2.5 m、長さ 31.0 mをはかる。後円部における墳丘規模と構造、ならびに外部施設の状況を確認するために設定したトレンチである（図６）。

３段目斜面　葺石を検出している。後円部頂近くでは拳大の葺石が比較的多くみられたが、原位置を保っているものは少ない。斜面の傾斜角度は後世の改変により正確に把握できないが、葺石残存部分で計測した結果、傾斜は一定ではなく、大きいところでは 13 度の差を確認した。傾斜が急になっている部分と、墳丘盛土の単位に急激な変化がみられる部分が若干重なっている点は重要である。

葺石の基底石付近の残存状況は良好である。基底石は長軸 50 cmほどの角礫で、それぞれの長軸が墳丘ラインに沿うように据えられており、レベルは標高 28.0 mと一定している。基底石付近では裏込め石の充填を確認している。トレンチ西端の基底石から 50 cmほど後円部頂よりに大型の角礫が据えられているが、これは裏込め石の充填範囲を示す役割をもっていた可能性も考えられる。

２段目平坦面　約 5.2 mの幅で検出した。前方部での平坦面の幅（７トレンチで 2.0 m以上）よりも広いことを確認しており、墳丘形態復元の際に注意を要する。埴輪列は旧墳丘面の攪乱により遺存していなかった。

２段目斜面　一部で葺石を検出した。拳大の角礫が墳丘中心に向かって差し込むように葺かれている。標高 24.6 m付近でやや大きめの角礫を数個検出しているが、周囲が著しく削られていることから、確実に基底石であるとは断定できない（図７）。墳丘構造に関しては、砂礫層の地山を削り出して整形し、その上にさらに盛土を施している様子を、トレンチ東壁に沿って設けた断ち割りの壁面で観察できる。地山整形の際に削られた旧表土は、３段目斜面の途中まで墳丘盛土として使用されている。

１段目平坦面　２段目斜面の基底石が不明確であり、また１段目斜面に

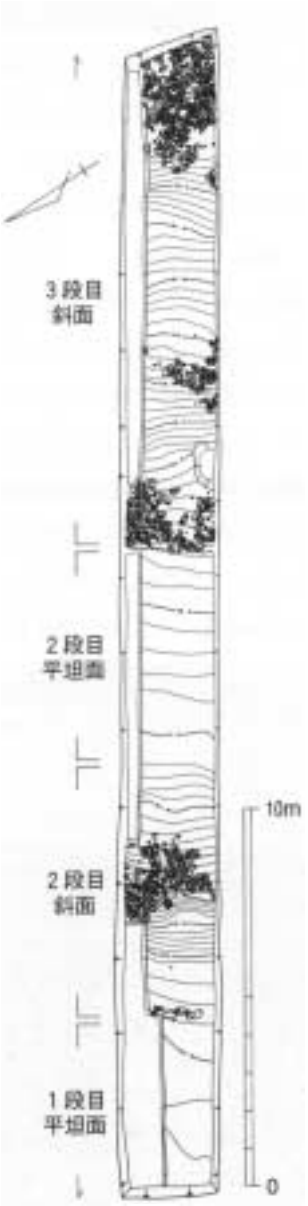

図６　13トレンチ平面図
（S：1/200）